



え どうまれうわきのかばやき  
江戸生艶気樺焼

山東京伝著 北尾政演（山東京伝）画  
寛政3～4年（1791～2）頃刊  
縦17.3cm 横12.6cm

江戸時代中期から、草双紙と称される本が出版され始めた。縦十八センチ、横十三センチ程で五丁一冊の二ないし三冊からなり、全丁に描かれた絵とその余白に埋められた文とで物語を展開してゆく。

赤本、黒本、青本などと表紙の色で呼ばれることもある。

安永四年（一七七五）、恋川春町による青本『金々先生栄花夢』が出版された。当時の風俗や世相を描写し、洒落や滑稽を交えた内容は、従来の主に小児向きだった黒本・青本と区別する意味で、以後、黄表紙と称されるようになる。天明五年（一七八五）、蔦屋

重三郎から出版された山東京伝『江戸生艶気樺焼』は、金持ちだが醜男の艶二郎が、女性にもてようと様々なことを企てながら失敗を重ね、最後には二七心中を図ろうとする話。当時多用された荒唐無稽な筋立てを用いない写実的な表現と、江戸の若者たちの夢を取り上げたことで黄表紙の代表的な作品となった。作者山東京伝は、北尾政演として活躍する絵師でもあり、本書に見える主人公の特徴的な上向きの鼻は、以後「京伝鼻」として作品中に描く自画像に用いた。掲出は寛政三〜四年

（一七九一〜二）頃刊行の再



板本。

田沼意次の政権下、世相が自由主義的な享楽気分にあつた中から生まれた黄表紙だが、意次に代わって登場した松平定信の儒教倫理的政治に対して、黄表紙が内包する「うがち」が色濃く出た作品も多く登場し、その故に過料や手鎖等の刑を受けるものも続出した。

（天理図書館 大西光幸）

天理図書館のお知らせ Tel:0743-63-9200 <http://www.tcl.gr.jp/>  
 平日（午前9時～午後5時半） 土・日・祝（午前9時～午後4時半）  
 ただし7月19日と30日は休み  
 （本欄にて紹介した名品の閲覧については係へお尋ねください）